

～じゅうにんという～

12月号は、できなさ（できない）の区別と指導方法について考えていきます



特別支援学校では、「できる」場面よりも「できなさ（できなかった）」という場面に立ち会う事が多くあります。指導場面では「できた」場面よりも「できなかった」という場面を分析していくことに価値があります（私たちの仕事の本質でもあります）。「できないことイコールわからないこと」と解釈をして指導の方略を探っていくと行き詰まってしまうということがあります。自閉症のある児童生徒によくみられる、大人の指示に応じたり合わせたりするのが苦手であって一見「できない」状態を呈したり、表出系の協調運動の障害や表出系の言語発達遅れがある場合は「わかっていても表出できない」という場合もあります。

感覚と運動の高次化理論を提唱された淑徳大学の故宇佐川浩先生（以下、宇佐川先生）は、図1「わからないからイコールできない」、図2「指示に応じるのが苦手できない」、図3「わかっていても表出できない」、図4「わからないのに一見できているように見える」というように「できなさ」を4つの種類に分類されました。



図1 「わからないからイコールできない」



図2 「指示に応じるのが苦手できない」

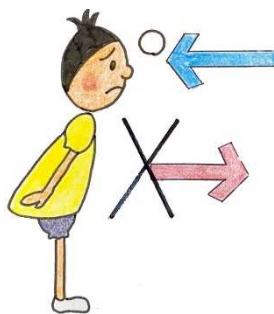


図3 「わかっていても表出できない」

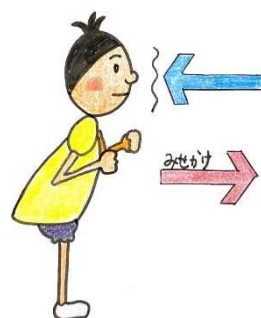


図4 「わからないのに一見できているように見える」

上記のような様子状態を未整理のまま「できる・できない、能力がない」と実態把握してしまうと指導の方略や教材（教具）の提示を誤ってしまうことを宇佐川先生は指摘されています。図1のようなわからないイコールできないという状態の場合は、これまで私たちの先輩方が大切にしてこられた「スモールステップ式」の指導が有効ですが、「応じられない」「表出できない」場合は、「人と合わせる（宇佐川先生は「人間がやわらかくなる」と表現されています）」という指導が必要です（詳しくは1月号で掲載します）。

冬休みの少し時間のあるタイミングで、2学期の子ども達の「できなさ」を振り返って、3学期に活かすことができればいいですね！！